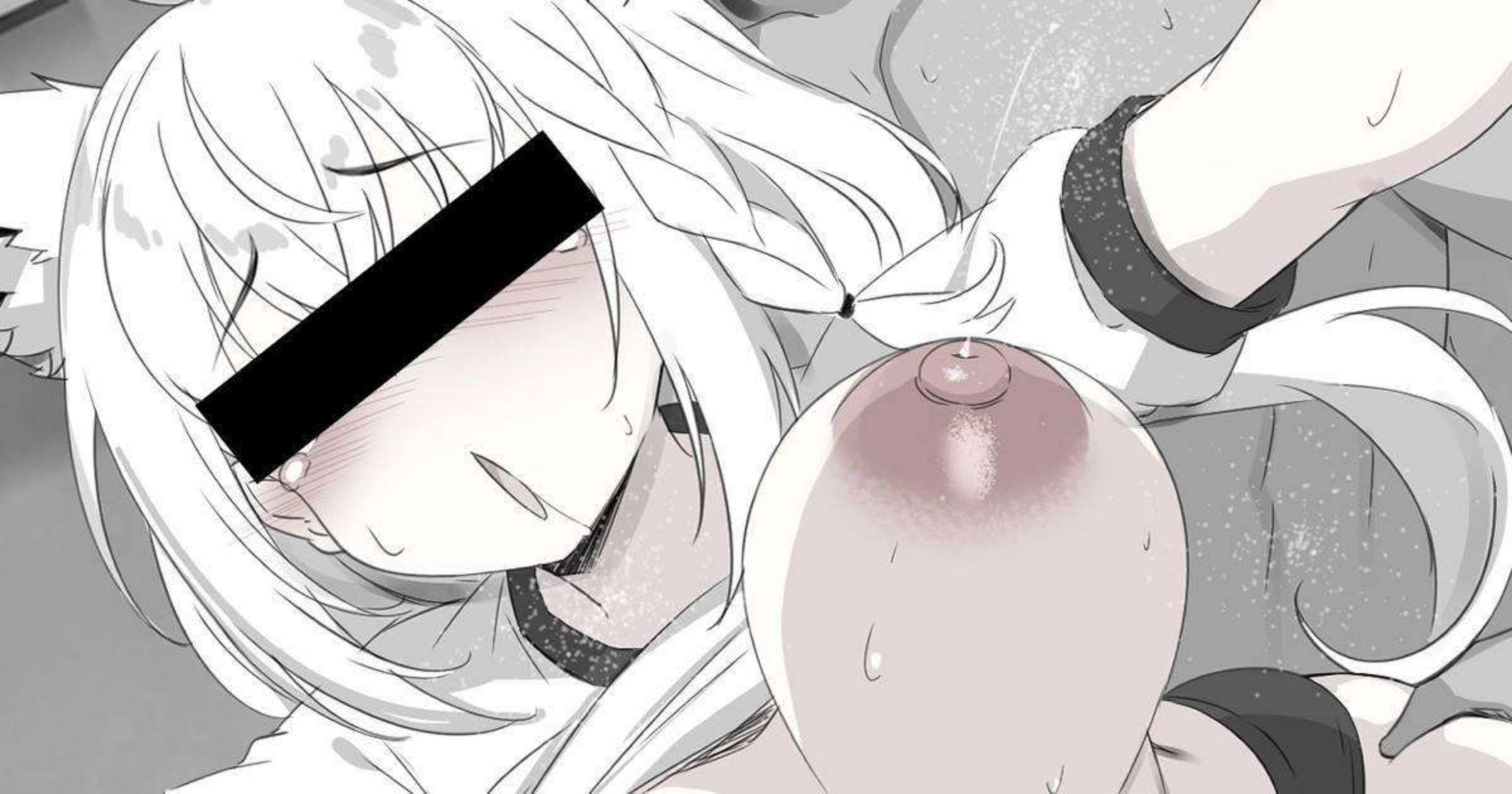




体育の授業が終わり、
体育教師のあなたが一人で器具の後片付けをしていた。

すると、
視界の端で白い耳がぴよこんと跳ねた。

「先生。白上也手伝いますよ」
「そ、そうか？ 助かるよ」

フブキは、にっこり笑ってボールを拾い上げた。



あなたは、ブルマに包まれた
むちむちのデカケツを
フブキの背後からこっそりと凝視する。

あなたは自らの股間が
びくびくと疼くのを感じた。

これは今に始まった
ことではない。

あなたはずっと前から
この白上フブキという
少女に夢中だった。

よーっしょ

さっきの授業中だって
フブキが飛び跳ねする度に
揺れ弾む乳や尻を目で追っていた。
ちらりと覗くヘソ、
食い込みを直す指先、
そこからはみ出たパンティの白。
生徒達の手前、
勃起を抑えるのが大変だった。

☆ 体育倉庫の中で、フブキと二人きり。

邪魔する者は誰もいない。

よからぬ欲望が、

あなたの中で急速に膨らんでいく。

その無防備なデカ尻は

あなたを誘っているようにしか

思えなかった。

あなたの理性はそこで

唐突に、あっさりと、

限界を迎えた。

よーっしょ



「ひあっ!？」

いきなり背後から抱きつかれて、フブキは目を丸くした。
あなたは無骨な手を伸ばし、フブキのおっぱいを思うままに揉みしだいた。

「せ、先生!? 急にどうし……やっ、触らないでくださっ」

「し、白上……俺、前からお前のことを……
だから、な? い、いいだろ?」

「なに言ってるんですか!」

「いいわけなっ……んんッ♥ち、乳首っ♥らめっ♥」

「お、ここがいいのか? ほーら、くりくりくり……」

むぎゅう♡

おにゅ♡

「やつ♡ ああん♡ やだ♡ やだあ♡」
「くくく、敏感だなあ……ここ、弱いのか？」
「そ、そんなことないですう♡」
「じゃあもつといじっても大丈夫だなw」
「んひひひひひん♡」

あなたはフブキのデカ乳輪ごと、
ぶつくりと勃起した乳首をごしごし扱いた。

あなたのちんぽは早くも破裂せんばかりに膨張している。
その膨らみを、フブキのブルマ尻にぐりぐりと押しつけた。

むぎゅう♡

おにゅ♡

「ひう♡ お、お尻に、硬いのが当たって……これ、先生の……♡」
「ん？ 先生の……なんだ？ 言ってみなさい」
「い、言えません♡ そんなこと♡」
「いいから言え！ ほらっ！」
「ンほおッ♡」

あなたはフブキのエロ乳首を
ぎゅううううつと抓り上げた

「ほら、なんなんだ？」

「ち……ちんぽです♡」

先生の……ぼ、勃起おちんぽですう♡」

「ぐふ、正解だw ちゃんと答えられたご褒美に、いいモノをやるぞ」

むぎゅう♡

おにゅ♡

「ご褒美って……ひっ♡」

あなたはフブキのブルマを乱暴にめくると、
しっとり濡れた肉の割れ目を剥き出しにする。

いやらしくぬめったその穴に、赤黒い亀頭が押し当てられる。

「いいや♡ ご褒美なんていらないです♡」

白上、先生とセックスなんてしたくないです♡

ああ♡ おちんぽずぶずぶ入ってきて……だめ、待ってえ♡

そ、それ以上挿れられたら白上の処女膜破れちゃう♡

だめ♡ だめ♡ ね、ねえ先生、今やめてくれれば誰にも言いませんから、どうか——」

むぎゅ♡

おにゅ♡

「ああああああああ——ッ♡♡♡♡」

「くおおおっ……」

「こ、これが白上のおまんこかあ！
しかもハジメテだったとは……感激だぞおw」

「はあ、あッ……せ、せんせ、抜いて♡
おちんぽ、きついですううう……♡」

「なに言ってるんだ？
ここからが本番だ、ぞー！」

「んひひひひ♡」

毎晩妄想の中で繰り広げていた行為を
ついに実現したあなたはフブキの柔らかな
ケツ肉を がっしりと捕まえながら
野獣のように腰を振った。

大人ちんぽを受け入れるには
明らかに未熟な少女の膣を容赦なく犯しまくる。
その度にフブキは汚いオホ声を上げてよがった。



「おっ♥ ほおっ♥
やらっ♥ やめへ……んおお♥」

他の誰も知らないであろう、
フブキの下品な顔。下品な声。

今はあなただけのものだ。

「は、入って、りゅう♥

先生のおちんちん、本当に、入って……

白上のおまんこ♥

ずぼずぼ♥ ずぼずぼってえ♥

いつか好きな人に捧げるはずだった

おまんこなのにい♥

レイプおちんぽで

好き勝手されちゃってるううう♥」

「なんだ、そんなロマンチックな夢を見ていたのか？
可愛い奴めw

それなのに、悪いなあ……

先生の汚いちんぽが乱暴に奪っちまってw

だが、無理やり犯されて感じまくる

お前みたいな変態には、ぴったりの初体験だろ？」



「か、感じてなんか、ないですう♡
白上は、そんな女の子じゃ……♡」

「こんなに愛液撒き散らして
おいてよく言うな？」

「ううう……ど、どうしてですか先生♡
なんでこんなこと……♡
し、白上が何か怒られるようなこと
したなら、謝りますから……
も、もう許して♡
おちんちん抜いてくだしい♡」

もちろん、彼女は何も悪いことなどしていない。
むしろその逆だろう。

誰も見向きもしない中、一人だけ先生の
手伝いを申し出るようないい子なのだ。

そんな心優しい少女を力づくでレイプする。

これ以上の背徳がこの世にあるだろうか。



「はあ、はあ……」

白上、お前のまんこ、よすぎるぞ……ッ！
もう、そろそろ……ッ！

「あつ、んんっ♡」

そ、そろそろって、何が……♡」

フブキは、はっと目を見開いた。

「ま、まさか♡」

そろそろって、先生……だ、だめですう♡
それだめえ♡」

あゝ

おゝ

「んー？ なんのことだあ？」

はつきり言わんとわからんぞ？」

「お、お射精ですう♡」

先生、白上の中に精液どぴゅどぴゅしようとしてますう♡
やだああ♡」



「ぐふふW 先生は昔っから
精液の量には自信があつてな
お前みたいなのザコまんこは一発で
孕んじまうだろうなあW」

引っ掛んだデカケツが
身じろぐように震え上がった。

「やだ♥ やだ♥

レイプおちんぽで妊娠するのやですう♥
お願い先生え♥

白上、このことは絶対誰にも言いません♥
だ、だから♥ おまんこの中に
お射精するのだけは……♥

快楽で頭が馬鹿になりながらも、
必死に許しを請うフブキ。

しかしそうやって言葉を尽くすほどに、
あなたの嗜虐心を煽り立てるとは思いもしないのだろう。



力強いピストンの度に肉のぶつかり合う音が弾ける。
汗やらよだれやらまん汁やら、いろんな液体が飛び散っていく。
甘ったるいメスのニオイが倉庫内に充満していた。

止まらないフブキのオホ声。

口では嫌がりながらもまんこは
ちんぽをぎゅうぎゅう締め上げて
子種を搾り取る気満々だ。

これで処女だというのだから
これはもう生粋の肉オナホと
言わざるを得ない。

「や、やめへえ先生♥
やめへえええ♥」

やめるわけがないのに
フブキがまだなんか言っている。
そしてついに――

「ぐうっ……出る!」



「ら、らめえっ♡
いやああああああアアア—
ツ♡♡♡♡

どびゆる♡
びゆるびゆるっ♡
ぶびゅびゅびゅびゅびゅ♡

放出されたザーメンは
あつという間に
フブキの子宮を埋め尽くした。

「おっ♡
もう、やめ♡
は、入らなっ……♡」

やめるわけがない。

あなたは、フブキのデカケツを
押し潰すようにしながら
容赦なく射精を続けた。



「んはあああああああ、あううッ
せ、先生のお射精
止まらないよおおおっほオ♡

あんなにやめてって言ったのに♡
人権ガン無視の
無責任種付けっだめえ♡

ああっ終わっちゃう♡
白上の人生

終わっちゃいますううう……♡」

「くく、大丈夫さ。

お前はこれから
先生の専用肉便器として
生きていけばいいんだよw」

「に、肉便器なんて♡
しよんなの嫌でしゅ♡」



「おらっまた出すぞ！
スケベまんこでしっかり
受け止める！」

「あひいッ♡
も、もう中はらめえええ♡
本当に妊娠しちゃいますうう♡」

「ふひW そりゃあ最高だなW
教え子レイプがこんな
気持ちいいなんて……
もっと早くやっておけば
よかったぜW」

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

「いいかあ白上い？
お前はもう俺のものだ。
これからもお前のいやらしい身体を
たっぷり指導してやるからなW」

「いいや……♡
そんなの……ンおッ♡」

あーん

あーん

あーん

あーん

数日後――



「あ、あの……先生」

「おお、どうした大神？」

「フブキを見ませんでしたか？
教室にいないみたいで……」

「ああ、白上か……」

「あいつなら今、先生の野暮用に
付き合ってくれているところだな」

「野暮用……ですか？」

「ああ。」

「使い終わったら帰すから
気にしないでいいぞ」

「そうですか……」

「わかりました」





(あつ♥ミオ♥こ
らめつ♥バレちゃう♥

白上が先生の肉便器になった
ことミオにバレちゃうよ♥

すぐそばにミオがいるのに♥

白上♥

先生が犯しやすいように

お尻突き出してオナホになりきってりゅ♥

ああ♥

おちんちんびくびくしてきた♥

だ、出されちゃう♥

今日もまた先生の

特濃ザーメン注がれちゃう♥

ミ、ミオの声聞きながら……

レイプおちんぽに中出しされて

イぐううううう♥♥♥

はっ

おっ

おっ

おっ

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ